

私はマスク人間

和歌山市立和歌山高等学校
玉置詞望

私にとっての「自由」とは、「自分の顔を気にせず笑えるようになること」だ。これは、私が自分の容姿を過剰に気にしてマスク依存症になった時から思い始めたことなのだが、コロナ禍になってから、その自由を実現するための方法ががらりと変える必要が出てきた。

私がマスク依存症になったのは中学校に上がった頃からである。もともと幼少期にあった、「自分の顔は他の子の顔と何か違う、かわいい感じがしない」という違和感が気づかぬうちに膨れ上がり、そのまま思春期に入ったことで“素顔を隠す”という形で外側に現れたのだと思う。「自分の顔が周囲より明らかに劣ると気づいたからには、周りに平然と晒すことはできない。悪評をつけられたくない。」そうして着け始めたマスクは日に日に、周りの目から自分を守ってくれることの心底の安心感と強固に結びつき、ほとんど体の一部と化していた。体育の授業や猛暑の登下校でも、汗みずくで普段以上に顔がまずいことになっていくと思うと外せなかったし、昼食は手で口元を隠しながら取った。音楽の授業で篠笛を吹く時にはどうしても顔を隠すことができないので、あまりに辛いと授業を抜けてトイレにこもり泣いたこともあった。けれども、周りが皆マスクをしていないのに私だけが年がら年中マスクをして過ごしているのは“普通じゃない”と分かっていた。いつかはマスクを外さなければ普通になれない。そのいつかはできることなら明日がいい。当時の私はマスクを外して外を出歩けるようになることこそが、己のコンプレックスの解消、すなわち私が自由になれる方法なのだと信じ切っていた。高校生になれば自分を取り巻く環境ががらりと変わる。高校入学をきっかけに心機一転、マスクを外して過ごそうと密かに決めていた。

コロナ禍が始まったのはそんな矢先のことだった。未知のウイルスの流行、緊急事態宣言の発令、学校が休校やリモート授業の仕組みになる……。いろいろなイレギュラーが次々に起きる中で、私がハッとしたのは“マスクをするのが常識、マスクをしないのが非常識”な世の中になってきているということだった。高校に入学した時も、その後の学校生活も、このご時世あたりまえのことではあるが、コロナ禍前の私の試みが実行に移されることはとうとうなかった。マスク着用が新常識となった時点で、マスクを外せるようになることで悩みを解消するという、方法もとい望みは絶たれたのである。たしかに、今となってはマスクをしていて不自然に思われることはまずないのだから、マスク依存症の方は即刻改善が必要というわけではなくなった。しかし、そうすると元の案を活用することが不可能となる。コロナ時代となった今マスクをしていることが普通なら、己の容姿を気にしすぎないためには内側で自分の素顔を受け入れられるようになる必要がある、と痛感した。

コロナ禍の終幕がいつ来るのかわからない。もしかすると終わらずにこの先も共存が続くかもしれない。いずれにせよ、コロナ禍と同時にマスクとも共存していくのなら、マスク姿の自分を不快に思わなくてよい。むしろ自分に似合いそうな色や模様のマスクを選んで自分の一部にしてしまってもいいのだ。今、私は、ただ外見上でマスクを外すだけでは根深いもやもやは消えないのだと予測する。

すぐには来ないいつか、マスクなしで外にでられる世の中になった時に、躊躇いなく外せるようになればいい。それまでは、自分の内側につけているマスクを外せるようになろうと思う。顔の良し悪しが脳を占拠することなく、自分は自分でいいのだと、自由に笑えるようになりたいから。